

## 第三章 返り点

本章では、返り点について説明していきます。

前章で述べたように、返り点は古典中国語を日本語として読むために、中国語の語順を日本語の語順に入れ替えるための記号です。そもそも日本語と中国語では語順が違うので、漢文を日本語として読むためには、もとの漢文で並んでいる漢字の読む順序を入れ替える必要があります。その時に、一つの文の下の方にある漢字を先に読んで、それから上の方にある漢字に返って読む、ということが起こります。

しかしながら、漢文はあくまで「上から下へ順番に」読んでいくのが原則です。返り点が付けられているところだけ、上に返って読みます。漢文を学習する時に、この「上に返って読まなければならない」ということがあまりにも強調されすぎるためか、白文や句点文を読む練習をしていると、とにかくやたらとひっくり返って読もうとする人がいます。しかしそうではありません。あくまで中国語と日本語とで語順が違うところだけに、返り点は存在します。返り点が付いている文章を読んでいる時には、上から下へ順番に読んでいって、返り点が付いている文字のところに来たら、その時はじめてそれぞれの返り点を持つ機能に従って、下から上に返って読んでいきます。あくまで原則は「上から下へ順番に読む」ということを、しっかりと頭の中に入れておいてください。

返り点は漢文を読むためのルール、決まり事です。理屈ではありません。たとえば、どんなスポーツ競技にも、どんなゲームにも、それを行うためのルールがあります。返り点もそれらと同じです。たとえば野球で「どうしてストライク三つでアウトになるの?」とか、「どうしてアウト三つで攻守交代するの?」と不思議に思うことはありませ

ん。それはルールとして決められていて、その決まりどおりにプレーを進めないと、野球という競技が成り立たなくなってしまうからです。漢文における返り点も同じです。返り点は漢文訓読という「競技」の「ルール」なのです。「どうしてレ点が付いていると下から返って読むの?」とか「どうして二点から一点には返らないの?」と理屈で考える必要はありません。返り点は漢文を読む時の決まり事として、その記号が持っている機能と意味を覚えていってください。

### 1、返り点の種類

返り点にはいくつかの種類があります。そしてそれぞれ独自の機能を持っています。では返り点の種類を見ていきましょう。

- (1) レ点
- (2) 一二点
- (3) 上下点
- (4) 甲乙点
- (5) 天地点

返り点にはこの五種類があります。「そんなにあるの?」と心配しなくても大丈夫です。この中で特によく使うの

は「レ点」と「二点」で、それに次いで「上下点」が出てきます。「甲乙点」や「天地点」は、出てくる頻度は多くありません。仮に出てきても、基本さえきちんと理解しておけば、それほど難しくはありません。

返り点ほどの位置に付いているのでしょうか？ 厳密に正しく言えば、レ点は漢文本文の漢字の左上に付いていて、その他の一二点・上下点などはみな漢字の左下に付いています。しかし初心者のうちはこのように覚えようとすると、混乱してしまいがちです。したがって、とりあえず「返り点は全て漢字の左下に付いている」と考えておいてください。本書では、全ての返り点は漢字の左下に付いているという方針で説明をしていきます。漢文がある程度上達してから「レ点は漢字の左上に付いている」と認識を改めるので、十分間に合います。

それでは返り点について、一つ一つ説明をしていきましょう。

## 2、レ点

「レ点」は、形がカタカナの「レ」のようになっていことから、「レ点」と言います。またその形は空を飛んでいく雁のようだということで、「かりがね点」と呼ぶこともあります。今では「レ点」という方が一般的です。「レ点」の機能は、「レ点が付いている漢字のすぐ下の漢字を読んでから、その後すぐにレ点が付いている漢字にもどって読む」というものです。

いくつか例を見てみましょう（以下漢文訓読としての読み方を示すために、書き下し文を使います。書き下し文の詳しい決まり事は、次章で説明します）。

### (1) 返り点に従って読んでみよう

興<sup>ス</sup>レ<sup>レ</sup>兵<sup>ヲ</sup>

(兵を興す)

原則は「上から下へ順番に」ですが、一文字目の「興」字にレ点が付いています。レ点が付いている字は、すぐその下にある字を読んでから、その次にレ点の付いている字を読みます。したがって「興」字のすぐ下の「兵」字を読み、その次に「興」字を読みます。右側に付いている送り仮名も合わせて、「兵を興す」という読み方になります。

尽<sup>ス</sup>レ<sup>レ</sup>心<sup>ヲ</sup>

(心を尽す)

これも同様です。「尽」字にレ点が付いているので、そのすぐその下の「心」字を読んでから、「尽」字を読みま

す。送り仮名も合わせて、「心を尽す」という読み方になります。

では次の文はどうでしょうか。

素<sup>ヨリ</sup>愛<sup>ス</sup>レ<sup>レ</sup>人<sup>ヲ</sup>

(素より人を愛す)

「素」字には返り点が付いていません。だからまずこの字を読みます。次に「愛」字ですが、この字にはレ点が付いています。したがってひとまず飛ばして、すぐ下の「人」字を読んで、それから「愛」字を読みます。送り仮名も含めて、全体をとおして「素より人を愛す」という読み方になります。

君 遣<sup>ハス</sup>之<sup>ヲ</sup> (君之を遣はす)

もう一つ見てみましょう。「君」字には返り点が付いていないので、まずこの字を読みます。「遣」字にレ点が付いているので、この字を読む前にすぐ下の「之」字を読みます。それから「遣」字を読みます。読み方は、「君之を遣はす」となります。

では次の文はどう読むのでしょうか。

欲<sup>ス</sup> 伐<sup>カント</sup> 胡<sup>ヲ</sup> (胡を伐たんと欲す)

「欲」字にレ点が付いていて、そのすぐ下の「伐」字にもレ点が付いています。つまり二文字続けてレ点が付いています。難しそうですが、基本に従って丁寧に考えていきましょう。

「欲」字にレ点が付いているのだから、「欲」の字を読む前にすぐ下の「伐」字を読みます。では「伐」字を読もうとすると、そこにもレ点が付いているのだから、レ点の決まりに従って、「伐」字のすぐ下にある「胡」字を先に読みます。「胡」字を読んだ次に「伐」字を読みます。「伐」字を読んで、ようやく「欲」字を読むこととなります。この一文全体の読み方は、「胡を伐たんと欲す」となります。

同じような文をもう一つ挙げてみます。

難<sup>シ</sup> 為<sup>シ</sup> 音<sup>ヲ</sup> (音を為し難し)

「難」字にレ点が付いているから、「難」字を読む前に「為」字を読みます。そして「為」字にもレ点が付いているから、「為」字を読む前に「音」字を読みます。つまり「音」字を読んでから「為」字を読み、それから「難」字を読みます。したがってこの一文全体で「音を為し難し」という読み方になります。

次に四文字からなる一文を読んでみましょう。

廓<sup>メテ</sup> 地<sup>ヲ</sup> 分<sup>ツ</sup> 利<sup>ヲ</sup> (地を廓めて利を分かつ)

文字数が増えても、基本に従っていれば恐れることはありません。「廓」字にレ点が付いているので、すぐ下の「地」字を読んでから、この字を読みます。次に「地」字ですが、この字には返り点は何も付いていません。だからこの字は読めます。「地」字を読んだのですから、レ点の決まりに従って、すぐ上の「廓」字を読みます。読み方は「地を廓めて」となり、これで「廓」・「地」の二文字を読みました。続いて「分」字を読もうとすると、この字にレ点が付いています。そこでこの字はとりあえず飛ばしてすぐ下の「利」字を読み、それからレ点の決まりに従って「分」字を読み、「利を分かつ」となります。一文全体の読み方は「地を廓めて利を分かつ」となります。

以<sup>テ</sup> 玉<sup>ヲ</sup> 為<sup>ス</sup> 宝<sup>ト</sup> (玉を以て宝と為す)

もう一つ同様の例です。「以」字にはレ点が付いているので、とりあえず飛ばしてすぐ下の字を読んでからこの字を読みます。すぐ下の「玉」字には返り点は何も付いていないので、そのまま読めます。「玉」字を読んだので、すぐ上のレ点が付いている「以」字を読みます。ここまでで「玉を以て」となります。さらに下に続けます。「為」字

にはレ点が付いているので、すぐ下の「宝」字を読んでから読みます。「宝」字には何も付いていないので、この字は読みます。そしてすぐ上の「為」字を読みます。「宝と為す」となります。四文字全体の読み方は「玉を以て宝と為す」です。

では次の文はどうでしょうか。

不<sup>レ</sup>能<sup>ハ</sup>無<sup>キニ</sup>求<sup>ムルコト</sup> (求むること無きに能はず)

やはりレ点の決まりに従って、一文字ずつ見ていきましょう。「不」字にレ点が付いているので、すぐ下の「能」字を読んでから「不」字を読みます。次の「能」字にもレ点が付いているので、すぐ下の「無」字を読んでから「能」字を読みます。次の「無」字にもレ点が付いているので、「求」字を読んでから「無」字を読みます。「求」字には返り点が付いていないので、この字は読みます。「求」字を読んだので、すぐ上の「無」字を読みます。「無」字を読んだので、すぐ上の「能」字を読みます。「能」字を読んだので、すぐ上の「不」字を読みます。全体をとおして、「求むること無きに能はず」という読み方になります。「不」字は一般的に古典文法の打ち消しの助動詞「ず」を当てて読むことが多いです。そして書き下し文にする時、助動詞は通常ひらがなで書きます。詳しくは次章で説明します。

## (2) 読み方に従って返り点を付けてみよう

これまで返り点・送り仮名の付いている訓点文を、返り点・送り仮名に従って書き下し文に直すことをとおして、返り点の機能を学んできました。今度はその逆、書き下し文に従って、句点文に返り点を付けてみましょう。

句点文に返り点・送り仮名を付けるとき、読む順番を考えず上から順番に付けているのをよく見かけます。相当な

上級者であればそのようなことができるかもしれませんが、初心者段階でそのような返り点・送り仮名の付け方するのは、とても難しいです。間違いも多くなってしまいうでしょう。句点文に返り点・送り仮名を付ける時は、読み方(書き下し文)に従って、読んでいく順番どおりにまず返り点を付けます。読む順番に返り点を付けるのですから、一文の中で上に行ったり下に行ったりします。返り点を付け終わったら、次に送り仮名を付けていきます。これも読む順番に従います。やはり上に行ったり下に行ったりします。少し面倒でも、この方法で返り点・送り仮名を付けていってみましょう。

棄<sup>ス</sup>甲<sup>ヲ</sup> (甲を棄つ)

この二字は「甲を棄つ」と読みます。この読み方に従って返り点を付ける時には、句点文と読み方を並べて考えていきます。読み方はまず「甲を」と読んで、それから「棄つ」と読むので、句点文では「甲」という字を読んでから、すぐ上の「棄」字を読みます。したがって「棄」字にレ点が付きます。さらに送り仮名を読む順番に従って付けていきましょう。「甲」字に「ヲ」、「棄」字に「ツ」という送り仮名が付きます。返り点・送り仮名が付いた訓点文は、

棄<sup>レ</sup>甲<sup>ヲ</sup>

となります。

恨 別 (別れを恨む)

この二字は「別れを恨む」と読みます。下の「別」字を読んでから、すぐ上の「恨」字を読みます。したがって「恨」字にレ点が付きます。送り仮名は、「別」字に「レヲ」、「恨」字に「ム」が付きます。

恨<sup>ム</sup> 別<sup>レヲ</sup>

抛 蜀 称 帝 (蜀に抛りて帝と称す)

次は四文字の文です。読み方は「蜀に抛りて帝と称す」です。まず「蜀に抛りて」だから、「蜀」字を読んですぐ「抛」の字を読みます。「抛」の字にレ点が付きます。続いて「帝と称す」と「帝」字の次に「称」字を読むので、「称」字にレ点が付きます。次に読む順番に従って送り仮名を付けていきます。「蜀」字に「ニ」、「抛」字に「リテ」、「帝」字に「ト」、「称」字に「ス」が付きます。

抛<sup>リテ</sup> 蜀<sup>ニ</sup> 称<sup>ス</sup> 帝<sup>ト</sup>

以 為 畏 狐 (以て狐を畏ると為す)

この文の読み方は「以て狐を畏ると為す」です。もとの漢文と読み方を並べてみましょう。まず「以て」と「以」字を読みます。一番上にある字を最初に読むのですから、句点文の「以」字に返り点は何も付きません。続く読みは「狐を」です。句点文の一番下にある文字です。この字から上の方へ返っていきます。どこへ返るのか。読み方を見ると、「狐を畏ると」となっています。つまり句点文「狐」字のすぐ上の「畏」字に戻ります。すぐ下の字からすぐ上の字に返るので、「畏」字にレ点が付きます。「畏」字を「畏ると」と読んで、次に「為す」と、すぐ上の「為」字を読みます。ここでも「為」字のすぐ下の「畏」字を読んでから、すぐ上の「為」字に戻ります。「為」字にレ点が付きます。さらに送り仮名を付けるならば、「以」の右側に「テ」、「狐」字の右側に「ヲ」、「畏」字の右側に「ルト」、「為」字の右側に「ス」を付けます。訓点文は、

以<sup>テ</sup> 為<sup>レ</sup> 畏<sup>ルト</sup> 狐<sup>ヲ</sup>

となります。

○練習問題 1

次の訓点文を読んでみましょう。

① 解<sup>キテ</sup> 帶<sup>ヲ</sup> 為<sup>シ</sup> 城<sup>ト</sup>、 以<sup>テ</sup> 牒<sup>ヲ</sup> 為<sup>ス</sup> 械<sup>ト</sup>。

② 吾<sup>ス</sup> 欲<sup>ス</sup> 用<sup>キント</sup> 兵<sup>ヲ</sup>、 誰<sup>カ</sup> 可<sup>キ</sup> 伐<sup>ツ</sup> 者<sup>ゾ</sup>。

○解説

① 解<sup>キテ</sup> 帶<sup>ヲ</sup> 為<sup>シ</sup> 城<sup>ト</sup>、以<sup>テ</sup> 牒<sup>ヲ</sup> 為<sup>ス</sup> 械<sup>ト</sup>。

「解」字にレ点が付いていて、「帶」字には何も付いていません。返り点の付いていない「帶」字を先に読んでから、「解」字を読みます。次に、「為」字にレ点が付いていて、「城」字には何も付いていません。「城」字を読んでから「為」字を読みます。さらに下に続いていきます。「以」字にレ点が付いていて、「牒」字には何も付いていません。「牒」字を読んで、その次に「以」字を読みます。その下、「為」字にレ点が付いていて、「械」字には何も付いていません。「械」字を読んでその次に「為」字を読みます。全体をとおして、「帶を解きて城と為し、牒を以て械と為す。」と読みます。

② 吾<sup>ス</sup> 欲<sup>ス</sup> 用<sup>レ</sup> 兵<sup>ヲ</sup>、誰<sup>カ</sup> 可<sup>キ</sup> 伐<sup>ツ</sup> 者<sup>ゾ</sup>。

「吾」字には何も付いていないので、まずこの字を読みます。次に「欲」字にはレ点が付いているので、すぐ下の「用」字を読んだ次に読みます。「用」字にもレ点が付いているので、すぐ下の「兵」字を読んでからこの字を読みます。「兵」字には何も付いていないので、この字は読みます。「兵」字を読んでから「用」字を読み、それから「欲」字を読みます。後半部分、「誰」字には何も付いていないので、まずこの字を読みます。次に「可」字にはレ点が付いているので、すぐ下の「伐」字を読んだから読みます。「伐」字には返り点は付いていないので、この字は読みます。「伐」字を読んだので、すぐ上の「可」字を読みます。そしてその後にはちばん下の「者」字を読みます。全体をとおして、「吾兵を用ゐんと欲す、誰か伐つべき者ぞ。」という読みになります。

○練習問題 2

読み方に従って、句点文に返り点・送り仮名を付けてみましょう。

③ 遂<sup>ニ</sup> 並<sup>レ</sup> 轡<sup>ヲ</sup> 論<sup>ル</sup> 詩<sup>ヲ</sup> 久<sup>ク</sup> 之<sup>ヲ</sup>。  
(遂に轡を並べて詩を論ずること之を久しくす。)

④ 昇<sup>リ</sup> 天<sup>ニ</sup> 入<sup>リ</sup> 地<sup>ニ</sup> 求<sup>ム</sup> 之<sup>ヲ</sup> 遍<sup>シ</sup>。  
(天に昇り地に入り之を求むること遍し。)

○解説

③ 遂<sup>ニ</sup> 並<sup>レ</sup> 轡<sup>ヲ</sup> 論<sup>ル</sup> 詩<sup>ヲ</sup> 久<sup>ク</sup> 之<sup>ヲ</sup>。

読み方が「遂に」から始まっているので、句点文の一番上の「遂」字には返り点は付きません。次に「轡を並べて」と「轡」字を読んでから「並」字を読むので、「並」字にレ点が付き「轡」字には何も付きません。その下、「詩を論ずること」と「詩」字を読んでから「論」字を読むので、「論」字にレ点が付き「詩」字には何も付きません。「之を久しくす」も「之」字を読んでから「久」字を読むので、「久」字にレ点が付き「之」字には何も付きません。続いて送り仮名を付けていきます。送り仮名も読む順番に付けていきます。読む順番に「遂」に「ニ」、「轡」に「ヲ」、「並」に「ベテ」、「詩」に「ヲ」、「論」に「ズルコト」、「之」に「ヲ」、「久」に「シクス」と付けていきます。全体をとおして訓点文は、

遂<sup>ニ</sup> 並<sup>レ</sup> 轡<sup>ヲ</sup> 論<sup>ル</sup> 詩<sup>ヲ</sup> 久<sup>ク</sup> 之<sup>ヲ</sup>。

となります。

#### ④ 昇 天 入 地 求 之 遍。

「天に昇り」と読むので、「昇」字にレ点が付き、「天」字には何も付きません。次に「地に入り」と読むので、「入」字にレ点が付き、「地」字には何も付きません。そしてさらにその下は「之を求むること遍し」と読むので、「求」字にレ点が付き、「之」字と「遍」字には何も付きません。送り仮名を付けていきます。「天」に「ニ」、「昇」に「リ」、「地」に「ニ」、「入」に「リ」、「之」に「ヲ」、「求」に「ムルコト」、「遍」に「シ」を付けます。全体をとおして訓点文は、

昇<sup>リ</sup>天<sup>ニ</sup>入<sup>レ</sup>地<sup>ニ</sup>求<sup>ムルコト</sup>之<sup>ヲ</sup>遍<sup>シ</sup>。

となります。

### 3、一二点

一二点は、二字以上隔てて上に返る時に用いる返り点です。漢文の漢字を上から順番に読んでいって、「二」という返り点が付いていたら、とりあえず飛ばします。そのまま下に続けて読んでいって、「一」という返り点が付いている字に来たら、その字を読んで、それからすぐ次に「二」という返り点が付いている字を読みます。そして、一二

点は下から上に返っていくことを示す記号なので、必ず文の下から上へ「一」「二」と付いています。

例を見てみましょう。

家 書 抵<sup>ニ</sup>万 金<sup>ニ</sup>。

上から順番に読んでいきます。「家」の字には返り点は何も付いていません。だからそのまま読みます。次の「書」の字にも返り点が付いていないので、やはりそのまま読みます。「家書」は「家族からの手紙」という意味の二字熟語です。次の「抵」の字には「二」という返り点が付いているので、この文の下に出てくるはずの返り点「一」が付いている字を読んでから「抵」字を読みます。したがってとりあえず飛ばします。次は「万」という字ですが、これには返り点が付いていないので、そのまま読みます。次の「金」という字には「二」という返り点が付いています。「二」という返り点が付いている字は、出てきた時に飛ばさずに読みます。ここが「二」という返り点や先に見たレ点と違うところです。「一二点」とまとめて呼びますが、「一」点と「二」点では、扱い方が違います。ここも「万金」という二字熟語です。「一」という返り点が付いている「金」という字を読んだら、その後すぐに「二」という返り点が付いている「抵」の字を読みます。これでこの例文の五文字を全て読みました。この一文は「家書 万金に抵<sup>ル</sup>。」と読みます。

もう一つ見てみましょう。

持<sup>シテ</sup>短 兵<sup>ヲ</sup>接 戦<sup>ス</sup>。